

神戸復興塾の助言

川中 大輔

「大人はもっと私たちを頼ってくれていい」。6月12日に石巻市内で行われた「震災復興基本計画へ提案！市民ワークショップ」に参加した中高生の声である。若者を支援対象から活動主体へと認識転換する必要性を若者から迫られたのだ。神戸でも震災を機に多くの市民活動が新たに生まれたが、災害はまちづくりの担い手としての自覚を覚醒する。若者の中に芽吹いたその自覚を育むためにも、若者のまちづくり参画の促進が求められる。

まちづくりワークショップへの参加を促し、若者の声を取り入れていくこともその参画の形の一つだ。しかし、若者の参画は形式的になりやすい。形式的参加は「(やつぱり)どうせ何を言っても変わらない」という失望感を生みかねない。もちろん、若者の声を全

て取り入れるべきだと
言っているのではない。
そこには「誠実な
対話」が求められる。
若者から発せられた
声に対して、どうい
うアイデアが実際に取
入れられ得るのか、反
映できないものはなぜ
反映できないのかな
ど、「子ども扱い」せ
ずに丁寧な声を返すべ
きだろう。責任を負う
やりとりの経験の中
で、責任感強化され
るのである。
こうした「声」を出
す活動だけではない。
実践活動に取り組むま
ちづくり参画もある。
石巻でも既に展開され
ているが、若者が地域
の様々な活動にボラン
ティアとして参加した
り、自主活動を展開す
ることも参画の形の一
つである。

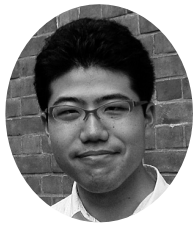
関西の若者と交流しな
がら、震災復興に関す
る学びを踏まえ、これ
からの復興過程で自分
たちが取り組みたい活
動を企画立案した。
8月下旬には、石巻
復興支援ネットワーク
の協力を得ながら京都
と石巻の若者は共に、
仮設住宅団地での鍋パ
ーティー等の活動に取
り組んだ。大人が用意
した活動に参加、協力
機会提供も若者のまち
づくり参画支援として
意味深い。
多様な参画過程を通
じて、「石巻のまちづ
くりに関わり続けた
い！」という気持ち
を温め、まちづくりの
未
来の担い手を育ていく
ことは、地域コミュニ
ティの持続可能性を高
める上で、非常に重要
なポイントとなる。そ
のためにも、若者が
の誇り」が、石巻への愛
着を形成し、まちづく
りの担い手としての自
覚を深め、今後の活動
の糧となる。石巻には
既に活動的な若者がい
る。この強みを活かして
いくことが重要だ。
若者の力が試されて
いるのではない。若者
に潜在している力を信
じ、問いかけ、踏み込
み、耳を傾けて待ち、
共に動く中で力を顕現
化させてい

若者に「復興の誇り」を育もう

く大人の力が試されて
いる。若者の力を創造

するだけでなく、若者自らの問題意識から立ち上がる企画を形にすることで、当事者意識は一層高まるだろう。
この活動中に「他の地域の高校生がどういった活動をしているのかを知りたかった」と石巻の高校生が言った。同世代の活動する仲間と地域を越えた出会いと交わりが、継続的な活動を下支えることとなる。こうした

「自分たちもこのまちを復興させたのだ！」と胸を張って言えるようにしたい。その「復興



かわなか・だいすけ

神戸市生まれ。ファシリテーター。阪神・淡路大震災の被災児童支援活動はじめ、青少年

支援・環境・まちづくりの市民活動に取り組み、「市民としての意識と行動力」を育む学びの場をつくるシチズンシップ共育企画を設立。現在、同代表。全国各地で市民教育や協働まちづくり、市民組織運営などのワークショップを担当。